

夏目漱石

独歩氏の作に
低徊趣味あり

独歩氏の作に祗徊趣味あり

余^よは個人として国木田独歩^{くにきだどっぽ}を知らぬ。西洋から帰って六年になるが、帰った当時は、ほとんど日本の文壇の様子を知らなかった。どんなものが流行^{はや}っているのか、何人^{なんびと}の作物が歓迎されているのか、雑誌などの種類でも、どれが文芸雑誌で、どれが商業雑誌だか、そうした事はまったく知らなかったのである。そのうちに、家に来る若い学生などの話に聞いて、少しは文壇の消息^{わか}が分るようになった。しかし独歩氏については知らなかったのである

る。古く、新体詩なんかを書いていた当時、独歩氏の姓名だけは知っていたが、小説家としての独歩氏はまったく知らなかったのである。

ところが、ある日理学博士の寺田寅彦てらだ とらひこが来て、「独歩集」を読んだかと言う。いっこう知らないと言うと、たいへん面白おもしろいからぜひ読んでごらんなさいと言う。寺田寅彦氏の『独歩集』が面白いと言った意味は、そのころ流行の小説と違って、新しく面白いというのである。たしか幸田露伴こうだろはん氏の『天うつ浪なみ』と相前後そらして出た時だと記憶している。とにかく、幸田氏は非常に褒ほめていた。

世間ではこういう小説をなぜ黙っているであろうか。いま少し褒めなければならぬはずだと、しきりに残念がっていた。で、それは余も見たいものだ、さっそく本屋に行つたが無い。寺田氏に借りようと思つたが、あいにく寺田氏も人に貸したままになつて、てもと手元になかつたので、それなり『独歩集』は読まずに了しまつた。その後雑誌に出たのを時々読んでいるうちに、第二独歩集といつたような『運命』が出たので、さっそく読んでみた。しかしその『運命』も全部読んだのではない。その中の三四編しか読んでおらぬ。で、余の独歩氏における知識は、

『運命』における一部分と、その他諸雑誌に散見したものをほんの少し読んだにすぎないので、余の独歩氏の作物に対する知識というものはきわめて浅い。で、他の独歩氏の作物を全部遺漏なく読んだ人や、また、幾度でも繰り返して読んだ人々のような、批評のできるわけもない。それに読んでから時日も経つし、また読む時にも、今日あるを予期して読んだわけでもないから、どうも記憶がきわめて茫漠ぼくぼくとしている。読んだ当座まだ印象の新しい時にしたところが、面白いと感じたところでも、批評するとなると、その面白いという感じを言い現わすために、

むりに言葉ことばを工夫くふうして、実際自分の面白いと感じたその感じとは、かけ離れた言葉を使用して、批評は虚偽になり易やすいものである。まして、漫然読んだ作物の古い記憶を喚よび起おこして言うのだから、とても完全な批評などということを期することはできない。で、その事はあらかじめ断っておかねばならぬ。

『運命論者』は面白いと思って読んだ。実際面白いという感があった。しかし、その面白いという感じは愉快という感ではない。ただ、奇であったのだ。あの作物が自然派の作物であるかどうか余は知らぬが、『運命論者』

を読んで得た感じは、ちょうどスチヴンソンを読んで得た感じに近い。スチヴンソン、プラスある物の面白いというのは、ただ、奇で面白いのである。スチヴンソンの書いた作物は突飛とっぴである。しかし、『運命論者』の作者は、この作物を、ただ、奇で書いたものではない。千人中ただ一人あるか無いかというような、最も珍らしい事件を借り、その事件によって、人生のある物を言い現わそうとしたので、スチヴンソンの作物とは、その趣がたいへん違ってくる。しかし、スチヴンソン、プラス、エツキスのほうをいうのではない。私の今面白いと言った

意味は、この『運命論者』の中に現われたところのシチュエーション、すなわち主人公の境遇および所為に、ロマンチック・エーアを帯びているその事が面白いと言ったのである。それはエックスのほうにも面白いところがあるにはあるが、余は世間で言うほど、大なる価値を認めていない。この『運命論者』プラス、サムシングについてにはあまり感服することができないのである。

次に今余の記憶に残って明らかなるは、『巡査』だけである。『巡査』はただ巡査なる一人ひとりの人間を描きだしたもので、その巡査が好よく出ている。この編の面白味は、

ちようどチェホフか誰かの書いたもので『爺』^{ジヤウ}というものがある。その『爺』の面白味が、『巡査』のようなあゝした面白味である。巡査なら巡査、爺なら爺を現わしたのは、巡査がどうしたということを書いたものではない。ただ巡査なる人はこういう人であつた、爺なる人はこういう人であつたということを書いたにすぎぬ。そこが面白いのである。巡査なら巡査についての観察を書いたものだからして、前の『運命論者』とはその面白みが違う。余の言葉で言うると、こういうものは^{ていかい}低徊趣味という。巡査がどうして、それからこうしたというように、

原因結果を書いたものではない。その巡査が明日はあすどうなっても、明日のことはかまわない。ただ、巡査その者に祇徊していれば好いのである。小こさんが酔漢の話をする。聴者はその酔漢の話をただ楽しんでいれば好いのである。その酔漢が明日の朝になってどうしたとか、こうしたとかいうことを聞く必要はない。聞かなくても、酔漢その者の所作行為に楽しむことができる。すなわち、筋とか結構とかいうものが面白いのではなくて、一酔漢なるものに祇徊して、その酔漢の酔態を見るその事に興味あり、面白味あるのである。それを余は祇徊趣味とい

う。普通の小説は筋とか結構とかで読ませる。すなわち、その次はどうしたとか、こうなったとかいうことに興味を持ち、面白味を持って読んでゆくのである。しかし、**低徊趣味**の小説には、筋、結構はない。ある一人の人の所作行動を見ていれば好いのである。『**巡査**』は、**巡査**の運命とかなんとか**い**うものを書いたのではない。ある一人の**巡査**を捉えてその**巡査**の動作行動を描き、**巡査**なる人はこういう人であったという、そこが面白い、すなわち**低徊趣味**なる意味において、『**巡査**』を面白く読んだのである。

余は高浜虚子たかはまきよしにその話をしたことがある。ところが虚子は、『巡查』は嫌いきらだと言う。面白くないと言う。あの叙述が自然でない。どうも拵こしらえたもののように思う、不自然であると言う。しかし、私の読んだ時には、別にそんな感じはしなかった。

『酒中日記』は、人は褒めていたようだが、私はあまり感服しない。一口に忌憚きたんなく言ってしまったえば、要するに不自然なところが多いように思われる。ではどこが不自然なのかと問われれば、一々本を繰ってお話しせねばならぬが、不自然なところが多いために、読みながら感興

が乗らなかつたように思う。

『竹の木戸』は悪いとは思わぬ。しかし、あれが近来出る他の人々の短編を抽^{ぬき}んでて面白いとは思わぬ。ことに独歩氏のために、褒めるほどのものではない。批難をいうと、あのお源とかいう女が、終りに首をくゝるのは不自然だと思ふ。かえつて殺さない方が自然である。もし殺すなら、いま少し緊張さして殺したほうがよからう。

(明治四一・七・一五『新潮』)

日本文学電子図書館

独歩氏の作に徘徊趣味あり

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 6 卷」角川書店
昭和42年7月30日 5版発行

日本文学電子図書館